郷土への見方・考え方を高めるキャリア教育

学校力開発分野（17220914）佐　竹　桂　一

小学校におけるキャリア教育が夢を語ることを重視するのに対して，中学校では将来の道を描きそのために何を学ぶ必要があるかをデザインする段階である。ここで郷土に向き合う視点を持つことは，重要な意味があると考える。本研究は，中学校におけるキャリア教育を，郷土への見方・考え方を高めることに軸をおき，カリキュラム・マネジメント的手法を活用しながら，計画，実践し，その成果と課題について検討するものである。

［キーワード］　郷土への見方・考え方，キャリア教育，カリキュラム・マネジメント，逆向き設計

１　問題の所在と目的

(1)キャリア教育の現状と課題

1999 年，中教審において初めて答申が出されて以降，キャリア教育は社会全体の中で育むものと捉えられそのための体制整備が図られてきた。2005 年からは文科省主体で「キャリア・スタート・ウィーク」が開始され，中学校での職場体験活動が全国的に展開されるようになった。地域での受け皿も根付いてきたが，キャリア教育が単なる職場体験に矮小化されているといった弊害も認められる(中教審，2011)。

このような状況で，2011 年，中教審は「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申)」を提示し，キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促す教育」と明確に定義づけた。「キャリア」についても，「人が，生涯の中で様々な役割を果たす過程で，自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」と意味づけられた。また，この答申では，キャリア教育を通して育てる力を基礎的・汎用的能力とし，「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の４つに大別されるものとしている。

2013 年には「第２期教育振興基本計画」が閣議決定され，教科等を通じた日々の学びと地域・企業との連携による体験を通した学びを 2 本柱とした活動を推進することが求められている。さらに，2017 年３月公示の新学習指導要領では，総則においてキャリア教育実践の在り方が示され，「学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら，社会的･職業的自立に向けて必要な基盤となる資質･能力を身につけていくことができるよう，特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて，キャリア教育の充実を図る」と明示されている。このように，キャリア教育は一層の充実が求められ，カリキュラム・マネジメント的手法を用いる学びの重要性が増してきているといえる。

(2)郷土への見方・考え方をめぐる山形県の状況

2011 年の答申で整理された基礎的・汎用的能力の１つである「人間関係形成・社会形成能力」には，社会へ協働して参画する力が求められ，地域と積極的に関わることが重視されている。つまり，郷土への愛情を豊かに育むための見方・考え方を高めることが求められていると考える。見方・考え方については，新学習指導要領において，「各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方」と示されている。そこで「郷土への見方・考え方」を次のように捉えることとする。郷土の見方は，ふるさとに住む様々な人々の生き方や生活の在り様に数多く触れることにより地域の良さを再確認するものである。そして郷土に対する考え方は，ふるさとの人々の生き方を通して地域との関わり方を見つめ，自己のこれからの生き方に活かしていくものであると位置づける。

本県では，郷土に関する副読本（山形県教育委員会，2016）を作成し，また「郷土 Yamagata ふるさと探究コンテスト」を開催し，郷土に対する見方・考え方を高める方策を展開している。また，ここで事例とする尾花沢市では，人口の流出や地域の担い手創出が大きな課題として顕在化してい

る。毎年，市長がふるさとの良さを伝える講演会を市内中学校の全３年生を対象に実施し，郷土に対する思いをメッセージとして発信し地域づくりを進めている。

これらのことから，郷土への見方・考え方を視点にしたキャリア教育を推進することには，大きな意義があると考える。

(3)研究の目的と方法

①研究の目的

本研究では，中学校２年におけるキャリア学習を，総合的な学習の時間（以下，「総合」と略す）の中核に据え，長期的な探究要素を加味した活動へ編み直しを行う。その際に，郷土への見方・考え方の視点から，基礎的・汎用的能力の高まりをカリキュラム・マネジメント３つの側面(PDCA サイクルの実施，教科横断的実践，外部資源の活用)から検討する。

②研究の方法

本研究では，これまで，独立的に行われていた体験的活動を総合の中で価値づけし直して，職場体験→上級学校訪問→高校調べ→立志式の流れをつくる。活動同士は問いの形でつなぎ探究的に進めていくように仕組む。それぞれの活動については,「逆向き設計」によるカリキュラムデザインで，基礎的・汎用的能力を含む郷土への見方・考え方の高まりを見取っていく。

社会科は，郷土への見方・考え方を高めるための良質な材料を提供できる教科である。２年生の地理的分野では,「日本の姿」の単元で，地域ごとの風土や災害とのかかわりから郷土を捉え直すことができる。「日本の諸地域」では各地方との比較から郷土の見方を広げることができると考える。歴史的分野では，地域教材を可能な限り発掘することで，郷土が果たしてきた役割の重さを学ぶことができる。こうして年間を通じて横断的な学習計画を組み実践を重ねていく。

③先行研究の検討

本研究の中心となる総合の学年カリキュラムの構築には「逆向き設計」の考え方を取り入れた。「逆向き設計」とは，1998 年アメリカのウィギンズとマクタイによって提唱されたカリキュラム設計論である。「逆向き」とは，学びの結果到達する子どもの姿を最初にイメージし，そのゴールに向かうプロセスをゴールからさかのぼってデザインするところから付けられた呼称である(図１)。

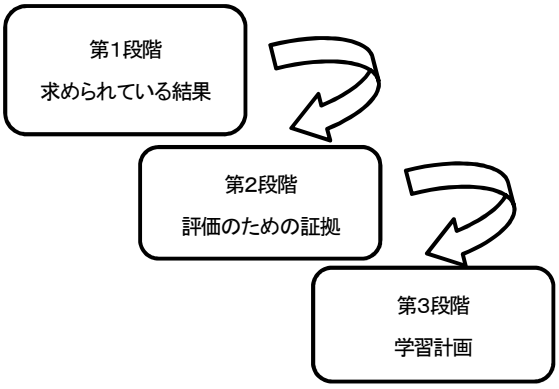

図１. 逆向き設計の３段階

日本へは西岡(2008)によって紹介がなされ，基になった著作も翻訳されている（ウィギンズ・マクタイ，2012)。「逆向き設計」は主に教科を主体としてこれまで実践が重ねられ，その活動のゴールはパフォーマンス評価として見取ることが推奨されている。パフォーマンス評価とは,「〇〇を創ろう」「〇〇を提案しよう」という生徒の能動的な活動を評価するものである。

総合との関連について西岡(2016)は，その探究的な単元構造に着目し，問い→調べ活動→発見の問題解決のサイクルを複数回繰り返すことの意義を強調している。つまり，学習者の立場から，主体的で探究的なアプローチが必要となることを重視し,西岡はこうしたサイクルを「探究プロセス」と呼んでいる。

探究プロセスの授業における進行について，白水(2017)は，教師の意図を時として越えて学びが広がる可能性があることを指摘している。白水はこの可能性のある授業を「前向き授業」と呼び，評価の視点から学びの広がりを阻害しない授業のあり方について言及している。

両者の探究に対する捉え方は，一見相違するが実質的にはほぼ同じと捉えられる。本研究では，以上を踏まえて,総合の活動の編み直しにおいて，次ページのようなカリキュラム構造(図２)を構築した。実践ではこれをもとに学年カリキュラム表を作成し，キャリア学習の諸活動のつながりを強固にし，教科との横断的な関連を図った。

２　実践と結果

(1)総合を核にした学年カリキュラム表の作成とその実践

勤務校では郷土愛を育む教育やキャリア教育について重点を置いているが，諸活動が単発的であ

ることは否めない。実践にあたって，キャリア教育を郷土への見方・考え方を高めることに軸をおき，図３に示すようなカリキュラム・マネジメント的手法を活用した「学年カリキュラム表」を作成し進めた。以下はその概要である。

①第１章「キャリアを知る」

総合の学習の始まりは職場体験の準備からとなった。最初に生徒へ投げかけた問いが「キャリアとは何か」である。疑問や必要感を持たせることを意識し集会にて問いかけた。

昨年までの職場体験活動の生徒のふり返りの内容は，仕事の内容がどうだったかという感想が主となっており，郷土の見方という概念は希薄であった。このような背景には，職場体験に向かう生徒の意識が，“仕事を体験すること”にのみ向けられていることに起因しており，ふり返らせ方にも課題があったといえる。藤田(2011)は，職場体験の意義と事前指導の重要性を指摘し，「何を学ぶために職場に行くのか，その学びを実現するために職場で自分は何を見て，どのような行動をとればよいのか」を生徒と共に共有することの重要性を問うている。そこで職場体験のねらいを練り直し，「人間関係形成・社会形成能力」の育成の場と位置づけ，職業人の仕事に対する姿勢や考え方，勤労観を学んでくることを意識させ準備活動を行うようにした。その手段として，職場の人々にインタビューをすることを課して体験に臨ませた。体験後のふり返りでは，地域の職業人とどのように交流してきたのかを記述する欄を設けねらいの具現化を図った。その後は，体験事業所毎にポスターを作成し７月の通知表配付の授業参観と連動させポスターセッションでのパフォーマンスを行い保護者に公開した。

②第２章「キャリア形成の道を探る」

２学期は，進路選択学習の問いとして「キャリアを形成する上ではどのような道があるのだろうか」という課題を設定し，体験と調べ活動を実施した。基礎的・汎用的能力の「自己理解・自己管理能力」を育むことをねらったものである。学級活動の時間で，進路の道の多様さを学び，自己の力を伸ばす道を考えた後，上級学校への訪問体験を行った。今年度からは，仙台から山形市内の大学や専門学校へ切り替え，山形における学びのリソースを再確認した。準備活動では，インタビュー項目を検討し訪問時の担当者やスタッフとの関わり合いを重視した。活動後は，個人毎にレポートでまとめ，訪問校毎にポスターを作成し文化祭で掲示し共有化を図った。この訪問の後，高校調べでは，より具体的な進路の道として雑誌やパンフレット，インターネットから情報を収集して，自分にマッチする学校を調べレポートにまとめた。

２学期後半は，「キャリアプランニング能力」を意識した問いとして「夢をもち自分のキャリアを描いてみよう」と課題を設定し，キャリアマップの作成(図４)を行った。本図のフォーマットは浅野（2017）の学校戦略マップの様式[1)]を参考にした。この様式を基に，筆者はキャリアを描くツールとしてアレンジを施している。右下段には「家族・地域」に関する記述を設け，自己のキャリアと郷土をつなぐ役割をマップに持たせた。

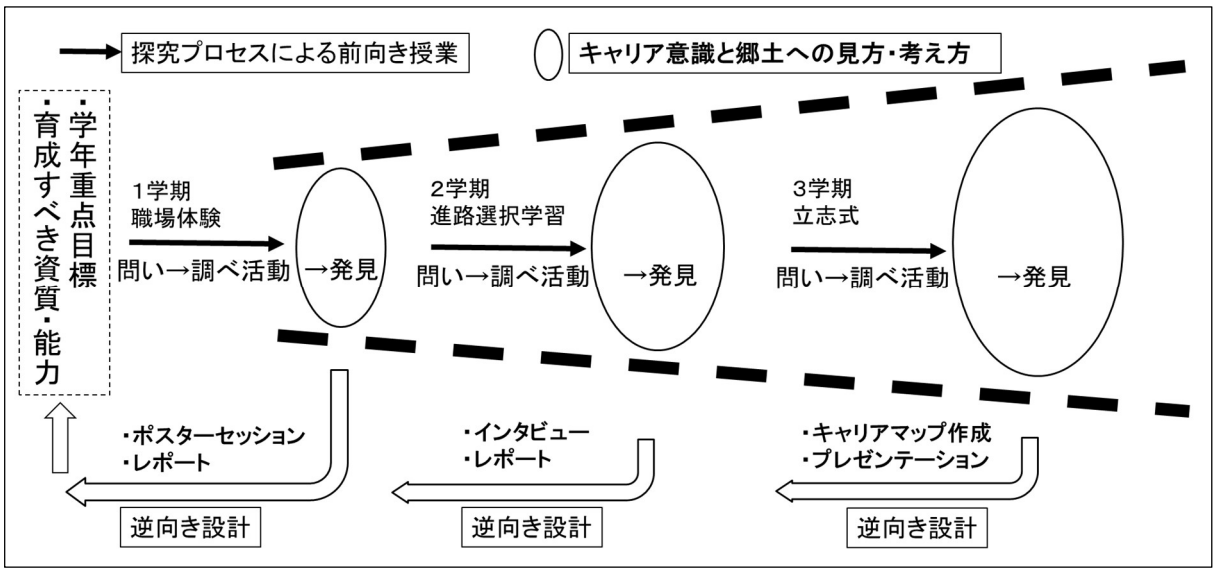

図２. 学年カリキュラムの設計構造（西岡 2016，白水 2017 より筆者が作成）

総合を核にした学年カリキュラム表　（第２学年）

Vol.5 H31.1.14

1．重点目標について
2年生の重要行事である職場体験を中心にして，行事と総合の関連性を強め，各教科で培った力を総合で活用する横断的な学習を展開する。
キャリア学習のねらいに，郷土への見方・考え方を高める視点を加え，自己の将来像を描けるよう仕組んでいく。

2．重点目標に対する子どもの現状と課題
○「協同的な学び」を基調とする学びのスタイルで活動し，他者との関わりを重視している。
○郷土のリソースについての理解ができている。
◆自己のキャリア形成に郷土との関わりを意識することが少ない。
◆キャリア形成に関わる情報を自ら収集しようとする力が弱い。
◆郷土の発展に関わる身近な人との交流を意識することが少ない。

3．重点目標達成のための取組(カリキュラムの構想)
・地域に生きる様々な大人との出会い・関わりの機会を設定し，体験させる学びを通じ，自己のキャリア形成と郷土に対する愛情を育む。
・学校の全体計画における2学年総合テーマ【地域との交流】を意識して，各教科，領域で関連内容を抽出し，学習時期を調整して授業をデザインする。

【重点目標】
総合を核にした教科横断的な学習で，自己のキャリア形成と郷土の見方・考え方を高める。

重点目標達成のためのカリキュラムデザイン

4月　5月　6月　7月　8月　9月　10月　11月　12月　1月　2月　3月

社会科　地理
「日本の姿」「世界と比べた日本」「日本の諸地域　九州～近畿地方」

社会科　歴史
「江戸時代」

社会科　地理
「中部，北海道地方」

社会科　地理
「関東，東北地方」

社会科　歴史
「明治時代」

教科とのつながり

国語科
手紙の書き方

音楽科　合唱コンクール
課題曲「ふるさと」

特別活動
適性を見つめる

道徳
「郷土愛」

美術科
レタリング

体育科
花笠踊り

郷土

自己

「情熱大陸　in尾花沢！」～郷土で働く，学ぶ，暮す人々との出会いを通して将来の生き方を考えよう！(70時間)

25時間　職場体験学習での探究

第１章　キャリアを知る
◎郷土で働く人々の情熱を感じる。
・キャリアとは何か
・働く人へのインタビュー

郷土の見方考え方

25時間　進路選択学習での探究

第2章　キャリア形成の道を探る
◎中学校卒業後の道筋を思い描こう。
・上級学校訪問とインタビュー
・高校調べ　・キャリアマップの作成

郷土の見方考え方

20時間　立志式に向けての探究

第3章　広がる未来，関わる郷土
◎自己の将来と郷土への思いを表現。
・キャリアマップの掲示
・立志式　・郷土PRのワークショップ

・修学旅行先での情報発信企画の準備

郷土の見方考え方

評価

めざす姿

・体験を通してキャリアについての理解を深め，ポスターセッションやキャリアマップ作成などのパフォーマンス課題に主体的に取り組む姿。
・ふり返りレポート「私が出会った山形人・尾花沢人」を1学期・2学期と繰り返していくことで，郷土に対する見方が広がり，思いが高まっていく姿。
・高まった郷土への見方・考え方を働かせ，郷土のPR活動を修学旅行の準備活動で協働的に企画・提案する姿

取組

カリキュラムの評価と改善（PDCA）
・お礼状やふり返りレポートの記述の中に働く人への思いが綴られる内容が見られたか。

外部資源の活用
・2つの校外活動（職場体験，上級学校訪問）での人との出会いが郷土への見方・考え方を高める効果を果たしたか。

教科との横断的実践
・教科との関連を図り，探究プロセスの進行に寄与することができていたか。
・修学旅行の準備活動に教科での学びが活用されたか。

図３．総合を核にした学年カリキュラム表

③第３章「広がる未来，関わる郷土」

これまでの立志式は，将来の夢を漢字一文字で表現し，個々に発表するものであった。しかし，発表内容は抽象的なものにとどまることが多く，求めるキャリア学習のゴールとしては物足りないものであった。そこで学年担任団でブレインストーミングを重ね，式のあり方を大きく変えた。前半は，式典として生徒代表５名による将来の夢の作文発表である。５名の選考はキャリアマップをもとにそれぞれ多様性のある夢の描き方をしていることを重視した。郷土との将来の関わり方にも多様な道があることを全体で共有していくことをねらいとした。後半は式に伴う記念行事の活動としてワークショップセッションを行うことにした。具体的には，郷土の見方・考え方を高める視点から，ふるさと尾花沢のＰＲ活動を修学旅行先で行うためのプランを提案する。この活動は総合の学びの最終パフォーマンスとして位置づけている。個人発表は生徒指導上の観点から本学年では効果的ではないと判断し協働によるパフォーマンスに変えたものである。この活動は，基礎的・汎用的能力の中における「課題対応能力」を養う効果を主にねらうものとして位置付けて計画したものである。

(2)郷土への見方・考え方を高める教科実践

社会科では，年間計画を見直し単元の学習時期を入れ替えた。これは総合との横断的な関連を図ったもので，立志式や修学旅行の準備を始める時期に関東地方と東北地方を学ぶことで生徒の学びの必要感を高めることをねらっている。そして，郷土への見方・考え方を高めるための教材を全単元で準備した(次頁，表１)。ここでは，いくつかの実践事例を示す。

①地理的分野

「日本の諸地域」では，単元毎に尾花沢や山形県との比較学習をデザインした。九州地方では，促成栽培という事象の理解で，宮崎平野の野菜づくりで事象を捉えさせていくところを，郷土のすいか生産と熊本県旧植木町との比較から授業を行った。熊本県旧植木町はすいかの生産日本一を誇るが，夏の生産はほぼゼロに近く，生産の大半が時期をずらしたビニルハウスによる促成栽培となる。それに反して，郷土のすいか生産は露地生産のみで，７・８月の２か月間に集中している。夏のすいか生産に限っていえば，全国一の生産量を誇っている。熊本とは好対照な時期で生産量のしのぎを削っているところが魅力的な教材であり，郷土の見方を広げる格好の材料といえる。生徒は

図４. キャリアマップのフォーマット（浅野 2017 より筆者が作成）

郷土のすいか生産が全国トップクラスであることは知っていたが，夏の露地もので全国一であることを知っていた生徒は少なく，改めて尾花沢のすいか生産のすごさを知った生徒が多かった。

②歴史的分野

江戸時代では特に元禄文化の学習で松尾芭蕉を採りあげ，そこから文化の特色を考えた。本市は，芭蕉が「おくの細道」紀行で最も長い10泊をした地域である。「涼しさを我が宿にしてねまる也」は当地において芭蕉が詠んだ句であり，市民にも馴染みが深い。この事実を活用し，江戸時代の交通や経済，文化の授業をデザインした。さらには，紅花を中心とした舟運や上杉鷹山を取り上げて中央の政治経済との結びつきを探った。歴史学習は郷土の範囲を県単位に広げることで，より多彩な教材を扱うことになった。単元の最後では，まとめ方にマインドマップを活用し，そこに地域素材を入れ関連を図った。

表１．郷土への見方・考え方を高める社会科授業

時期	単元	郷土を意識した学習活動
４月	日本の姿	・尾花沢の豪雪の原因を，日本の気候の特色の全体像から探る。
５月 ６月	世界と比べて見た日本	・日本の災害とその特色を郷土のハザードマップや3D地図で捉える。 ・防災クロスロードと地域への防災意識調査を実施。
７月	九州地方	・熊本県旧植木町と尾花沢とのすいか生産の違い。
９月	中国・四国地方 近畿地方	・交通網の整備とストロー現象を山形県の高速交通網と比較。 ・過疎問題の比較と尾花沢。 ・琵琶湖と淀川の関係性と最上川。 ・京都の景観条例と銀山温泉の比較。
10月 11月	江戸幕府の成立と政治改革 元禄文化と化政文化	・江戸の交通と舟運，紅花と酒田。 ・元禄文化での松尾芭蕉と尾花沢。 ・江戸後半の山形城と商人の姿。 ・上杉鷹山と江戸の政治改革の比較。
12月	中部地方 北海道地方	・自動車産業と尾花沢の関連企業。 ・北陸との文化的共通点と差異。 ・尾花沢市内にある開拓地。
１月	関東地方 東北地方	・山形（尾花沢）の生活と関東の生活スタイルを比較。
２月 ３月	近代国家の成立と明治維新	・三島通庸による山形県の整備。 ・鉄道敷設と山形，大石田駅の成立。

(3)実践の結果

総合と社会科の両面から実践を重ねてきた結果，生徒のふり返りとキャリアマップの記述からさまざまな変容が捉えられるようになってきている。

①総合のふり返りからみる変容事例

次に示す３人の生徒の手紙は，職場体験後のお礼状からの抜粋である。３人に共通しているのは，学んだこととして，仕事の内容よりも仕事に従事している人を対象としている点である。特に男子Aは，教室内では個性的な言動が多く，人間関係の築き方で助言が必要な生徒であるが，以下のように手紙に思いを乗せ，人を視点に見ることができていたことは意外であった。このような変容は１学期当初から各クラスの生徒に見られるようになってきた。「郷土＝人」という見方・考え方ができつつある証しといえる(以下，表中のアンダーラインは筆者の手によるものである)。

表２．職場体験のお礼状でのふり返り事例

男子A	・・・体験の中で特に印象に残ったのは，皆さんが仕事中ずっと笑顔でいたことです。周りの人が笑顔でいると，こっちまで笑顔になるし，うれしい気持ちになります。だから，職場体験学習のときも三日間，仕事に取り組む姿勢や働く意味について楽しく充実して学ぶことができました。・・・
女子A	・・・体験の中で特に印象に残ったのは，お年寄りに対する優しさや，積極的に仕事をしていることです。お年寄りにしゃべりかける時に耳元で大きい声を出して言ってあげたり，車イスで押している時に，手の置く位置をまちがえてしまっている時に，すぐ気づいてあげて，声をかけていて，優しさであふれていて，いいなと思いました。他にも，自分の仕事が終わっても，すぐに他の人の手伝いにいくのがとても早くてすごいなと思いました。・・・
男子B	・・・おかげさまで，仕事をしている人の大変さや，それぞれの仕事での働く意味などがとても分かりました。職業体験の中でとくに僕の印象に残ったことは，利用者の方の笑顔やそれに対する職員の方の笑顔です。利用者の方の世話をするということはとても大変だと思うけど笑顔を絶やさずにいることがとても疑問でした。どんな時でも優しく接しているところに感動しました。・・・

次に示す表３は，上級学校訪問のふり返りレポートの中で，訪問校での交流で聞いた言葉に大きな影響を受けた事例である。

表３．上級学校訪問でのふり返り事例

女子B	第一印象は女の人が多い場所だと思っていました。でもそんなことはなくて，たくさん男の人もいた。学長の〇〇さんから学んだことがある。それはめだかの話。チャンスをつかむあみを持たなければならないってこと。３０円のめだかをつかむのではなく，１万，１０万円のめだかをつかまえようとする。夢は努力でつかめる。風はついている。夢をつかむあみを準備。とても私にぴったりで共感した。これからがんばる。

女子Bは，学ぶ意欲や理解が不十分であることが多い生徒で，年度当初は自己の将来像を未だ描ききれなかった生徒である。上級学校訪問での学長との出会いとその講話は，彼女の心を動かし，前向きなふり返りをするに至っている。その後は保育士を目指す目標を立てるまで意識が高まりキャリアマップを描くことができた。

②キャリアマップによる変容

キャリアマップでは，当初は右下段の「家族・地域」の記述で苦慮する生徒が多く見られた。これは郷土への見方・考え方が成長段階であること

を物語っている。注目すべき点として，職場体験をきっかけに，地元機械メーカーへの就職を希望する生徒や，地元で農業や保育士を希望する記述が出てきことである。また，関西で夢を実現させようと決意する生徒が，ふるさと納税で地元に貢献するという記述や，社会人になってもボランティアで花笠踊りに参加するという記述も見られた。

キャリアマップの目指すところは，地元に生徒を残すという一義的なものではなく，多角的な立場で郷土を思い，将来にわたって関わっていこうとする姿を養い，それを可視化するところにある。また，描くことで生徒のキャリアプランニング能力を高める効果が認められ，これまでの作文中心の成果物に比べ，将来の描き方が具体的になる効果がみられた。担任団からは，これまでの活動よりも将来の姿が見えやすいと好意的な声が寄せられた。教師はマップをもとに生徒の将来にアドバイスをすることが容易となった。キャリアマップは教師と生徒の間の良き媒介役を担ったといえる。

③社会科のふり返りからみる変容事例

地理でのふり返りでは，他地域との比較から郷土のたくさんのリソースに触れ，新しい発見があった記述が見られた。その中で注目すべき事例を紹介する。

表４. 社会科授業でのふり返り事例

女子C	・・・たくさんの観光資源があるが，それらはただの観光に来た人達が楽しむためのものでしかない。だから楽しかった，で終わらせるのではなく，ずっといたいと思わせるのが重要。銀山はずっといたいと思っても住めるわけではないし，お祭りもずっとしているわけではない。観光名所が人気でも尾花沢市が人気なわけではないので，観光業だけに力をいれるだけではなく，勤務先などの充実や生活している中で「住んでよかった」と思える町づくりが必要だと思う。
男子C	・・・うまく地方の情報を使うと，地元の情報や修学旅行など，さまざまなものにつながるからとてもいいと思う。マインドマップは楽しいし，うまく頭の中を整理できるので，多くの情報があつまったり，発展問題などに使えたりするとべんり。しかも，ノートにもまとめやすくなって，学力の向上がねらえると思う。

女子Cは，郷土のリソースが人寄せの観光で終わることへの警鐘を鳴らし，地域づくりの本質にたどり着いている。このふり返りは９月の後半に行なっており，地理の比較学習が近畿地方まで終えた段階のもので，比較学習の繰り返しで自己の中に町づくりに対する問いが生まれてきたと考えられる。

歴史では，学習内容の中に地域史の視点を入れることが学習の負荷を大きくすることになると懸念されたが，アンケートやふり返りからは好意的に受け入れられた状況がうかがえた。男子Cのふり返りは，歴史学習に地域の視点を入れたことが，歴史だけの学習にとどまらず，総合の活動と結びついていることを述べている。特に「さまざまなものにつながる」という表現を自ら使っているところは注目される。これは，社会科の学びが広がりを見せていると捉えることができよう。

３　考察

以上のとおり，キャリア教育を郷土への見方・考え方を高めることに軸をおき，カリキュラム・マネジメント的手法を活用しながら計画，実践した。ここではカリキュラム・マネジメントの手法である３つの側面からそれぞれ考察する。

(1)PDCA サイクルでの学年カリキュラム表の運用

活動同士の間で問いを持たせて探究的に進めるという形ができたことの背景には，学年カリキュラム表が担任団で共有された意義が大きい。学年会でカリキュラムについて協議を重ねたことで実を伴うものにしていったといえる。学年カリキュラム表を標識にしたことにより，今何の力が不足していて(C)，どうしなければならないか(A)の見通しを立てた活動ができるようになってきた。学年カリキュラム表は，その都度書き変えて修正を図り(P)，常に手元にあることで，カリキュラムが「見える化」され，一人一人の教員が学年経営に主体的に参画する風土ができてきた(D)といえる。学年会の度に改訂版をこまめに配付したことも功を奏したと考えられる。

(2)横断的な教科指導による実践の効果

社会科は，教科の特性上，郷土への見方・考え方を高める力を育む学習との親和性は他教科に比して高く，横断的なカリキュラムを仕組みやすいといえる。地理・歴史共に，郷土の視点を入れることは，生徒の中に郷土リソース（地域素材）を再認識する場となる。つまり，これまで意識してこなかった地域の社会事象を価値づけし直し，そこに暮らす人々がより価値あるものとして昇華してくるということである。社会科授業のふり返りからは，尾花沢や山形の地域素材を授業で活用したことにより，地理・歴史の分野を越えたつながりの意識が芽生え，さらに総合や特別活動とのつながりを生徒自身が感じるようになってきている。これは，年間を通じて横断的な教科指導を意識し

た実践を行ってきたからこそ起きた萌芽といえよう。ただ，歴史的分野においては，功績のあった人物や歴史事象が一般的でないことが多く，知識の習得に時間をかけなければいけない点が浮き彫りになってきた。内容の精選が必要である。

(3)外部資源の活用

本実践におけるカリキュラムでは，職場体験と上級学校訪問で校外の多様な資源を活用する内容となった。外部の職業人や大人との出会いが生徒のキャリア意識を高め，地域との関わり方を考えるきっかけをつくったことは，ふり返りやキャリアマップ等の成果物からその効果が図り知れる。こうした外部資源の活用の意識は，学年担任団にも変化をもたらしている。職場体験のポスターセッションを保護者へ公開する際の準備への主体的な取り組みや，修学旅行で郷土をＰＲする際に，東京の郷友会の方々を呼んで交流してはどうかという広がりにつながってきている。この発想は，郷土への見方・考え方を高める視点を持つことを教師自身が意識したことによって生じた結果といえよう。つまり，外部との連携は，人との出会いによって自己が成長していくことを学ぶ上で，大きな効果を生むということである。これからもキャリア学習では欠かせない側面となってくると思われる。

４　到達点と課題

カリキュラム・マネジメント的手法を活用することにより，学年を中心としたキャリア学習が効果的に推進されることが明らかになった。そして，郷土への見方・考え方を高めるという視点を入れることで，生徒のキャリアに対する意識が高まり，具体的な将来像を描けるようになることがわかってきた。人に着目したことが有効であることが示されたといえる。しかしその検証について今回は，統計学的根拠に基づくデータを示すまでには至らなかった。キャリア教育の性格上，一人一人の内面に沸き起こる小さな変化を丁寧に追いかけ見取っていく必要があり，学年をまたいで３年間で培っていくものといえる。大人になって社会で活躍するようになって初めて完結するものなのかもしれない。今回は特徴的な変容を事例として取り上げており，学年全体の中でカリキュラムがどう効果的に作用したかは今後の追跡課題として残った。

今後は２年生で得られたこの成果を，１年生や３年生とつなぎ，学校全体で取り組むキャリア教育のカリキュラムとして整備することが必要であり，本研究はそれに寄与すると考える。

注

1)2017年９月の教職員支援機構の学校マネジメント研修に筆者が参加した際に，兵庫教育大学浅野良一教授が担当した講座における学校戦略マップづくりで用いられたフォーマットである。戦略マップは学校経営への職員参画を促す研修ツールとして注目されている。

引用文献

中央教育審議会(2011)「今後の学校におけるキャリア教育･職業教育の在り方について(答申)」，文部科学省，p17,pp25-27.

藤田晃之(2011)「職場体験活動の事前指導・事後指導をどうするか」『キャリア教育実践講座』，厚生労働省学校教育領域におけるキャリア形成支援資料,p4.

G.ウィギンズ　・J.マクタイ著　西岡加名恵(訳2012)『理解をもたらすカリキュラム設計ー「逆向き設計」の理論と方法』,日本標準,p24,pp26-27,p190.

西岡加名恵(2008)「『逆向き設計』とは何か」西岡加名恵編『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』,明治図書,p12.

西岡加名恵(2016)『教科と総合学習のカリキュラム設計ーパフォーマンス評価をどう活かすかー』，図書文化社，pp58-66.

白水始(2017)「評価の刷新-「前向き授業」の実現に向けて-」『国立教育政策研究所紀要』146集,pp39-41.

山形県教育委員会(2016)『郷土Yamagataー語って創る　やまがたの未来ー』山形県教育委員会.

参考文献

田村知子・村川雅弘・吉冨芳正・西岡加名恵(編著)(2016)『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』，ぎょうせい.

Development of a career education program for junior high school students based on the local community

Keiichi SATAKE